

# 前田家本『承久記』にみる王威と神意

北 村 昌 幸

## 一 はじめに

鎌倉時代における公武の力関係を決定づけたのが承久の乱（一二二二）であることは、衆目の一致するところだろう。平城上皇や崇徳院の例とは異なり、後鳥羽院は「ただ人」北条義時と争って敗れてしまった。朝廷の権威が深く傷つけられ、勝者たる武家の発言力が飛躍的に増大したことは想像に難くない。後嵯峨天皇の即位も、伏見天皇の立太子も、幕府の口添えによって実現したと伝えられている。

王の至高性という神話をおとぎ話に変えてしまった大事件をどのように解き明かすか——、中世の歴史叙述作品はさまざま方法でこの問題に取り組んでいる。儒教的徳治主義の立場から論じようとするのが『六代勝事記』<sup>(1)</sup>、前世の因縁を持ち出すのが『増鏡』<sup>(2)</sup>、そして、王威を最初から相対化してしまっているのが『承久記』である。ただし『承久記』の場合、古態本とされる慈光寺本がこうした傾向を一貫して示しているのに対し、大幅に改作された流布本や前田家本はその限りではない。慈光寺本の作中人物が言い放つ「権大夫（＝北条義時）モ桓武天皇ノ後胤ナリ。誰カ昔ノ王孫ナラヌ」という嘲笑は消え去り、代わって、朝敵の立場におかれた鎌倉武士たちの畏怖心を取り沙

汰されている。北条泰時率いる軍勢が宇治の平等院に向かう場面の、「天の責を蒙にこそ、十善の帝王に弓を引にやと心細くぞ成にける」などがわかりやすい例だろう。王威は命脈を保っているものであり、だからこそ、帝王敗北を語るにはそれなりの説明が必要だった。『六代勝事記』由来の政道批判が作品冒頭部分に導入されたり、『八幡愚童訓』甲本同様、讒者による煽動が乱の原因と見なされたりする所以である<sup>(3)</sup>。

その一方で、後出版には、朝廷方の武士山田次郎重忠による後鳥羽院批判「日本一の不覚人をしらずしてうきしづみつる口おしさよ」も見えている。生来の院の器量不足を見下そうとするこの言葉は、慈光寺本の三浦胤義の発言「口惜マシマシケル君ノ御心哉。カ、リケル君ニカタラハレマイラセテ、謀反ヲ起シケル胤義コソ哀ナレ」を受け継ぐものである。王法相对化が前提であった古態本文の名残と言えようか。改作後の『承久記』においては、こうした叙述と、他文献の影響下で新たに育まれた叙述とが重層し、多角的に王威減退が語られることとなっている。とくに前田家本は独自の本文改訂によって、流布本よりも王法相对化を推し進めていることが知られる。旧稿ではその一端を取り上げたが<sup>(4)</sup>、今回あらためて遺漏箇所を俎上にのせることで、該本の性格を捉え直してみたい。

## 一一 拒絶される帝王

前田家本『承久記』が流布本系本文をもとにして作られていることは、昨今定説となりつつある。その痕跡は日下力氏によって多数指摘されているのだが<sup>(5)</sup>、私見では、朝廷方軍勢催促の記事も一隅に加えてよいと思われる。まずは流布本から引用しよう。上巻の伊賀光季邸襲撃記事に続く場面の一節である。

A―奈良法師ヲ被レ召ケレバ、僉議シテ申ケルハ、「平家、此寺ヲ焼払テ跡方モ無リシヲ、鎌倉右大将力ヲ合テ当国ノ守護人ヲノケ、東大・興福寺ヲ再興シ、供養ノ時ハ仰ニ随ヒ上洛シテ守護ヲ加、随分志深リシ事ナレバ、只今モ源平争事アラバ、何度モ

白旗ノ方人ヲシ命ヲ可レ統ナレドモ、是ハ一天ノ君ノ仰ナレバ、王土ニスミナガラ、イカデカ随奉ラデモ可レ有ナレバ、少々進ラセヨ」トテ、学生ニハ土護ノ覚心、堂衆ニハ円音、是等二人ヲ始メトシテ、事ヲ好ム悪僧少々ゾ参ケル。

南都の衆徒は以前から鎌倉幕府に借りがあるために、朝廷方に加わることを躊躇していたという。それでも、結局は王民としての義務を果たすべく僧兵を派遣している。王法秩序体制は依然健在のようだ。流布本ではこの後、北条義時追討の院宣が下され、いよいよ承久合戦が本格化していく。

一方、前田家本の場合、Aに相当する記事はずっと後の下巻に収められており、その代わり、上巻の当該箇所には次のように記されている。

十六日の卯の時に東西南北五畿七道に綸旨を分て下さる。南都山門を始として、諸寺諸山へ悪僧共をめす。悉可レ参よし領掌申す。

上巻の時点で南都がこのように参戦を促されている以上、前田家本の下巻に配置されているA相当記事（後掲のB）は、二度目の軍勢催促として理解しなければなるまい。しかしながら、一度目ならぬ二度目の僉議で鎌倉・畠山が初めて話題になったとする前田家本の構成は、いかにも不自然である。これは本来の形（流布本型）を強引に作り変えた結果ではないか。仮に、下巻に至ってから南都勢のジレンマを語ることが、改作『承久記』の当初の目論見であったとするならば、その趣旨と抵触する恐れのある記事を上巻に載せることは、けっして本意ではなかったはずである。にもかかわらず、前田家本は上巻において、鎌倉・畠山をおくびにも出さず、後鳥羽院の催促に直ちに応じる南都勢を登場させてしまっている。こうした杜撰さは、白紙の状態から筆が執られたときに生じたものではなく、先行本文の改訂が行われた際の不注意によるものではないだろうか。前田家本が「雑駁」で「質の良くない改作本」と評されていること<sup>(6)</sup>が思い出されてくる。

では、なぜ流布本のAを下巻に移すという操作が必要だったのか、その理由を探ってみたい。手がかりは問題の記事の中にある。じつは前田家本では、挿入位置が変更されているだけでなく、本文自体にも手が加えられている。

B―六月十三日官軍手手に向けり。南都の大衆をめされけり。山門の大衆をば宇治にさし向、南都の大衆をば勢多へ可被<sub>レ</sub>向由、已に治定する処に、遅参いか体の事ぞやと、宣旨重て下さる。僉儀しけるは、「治承四年に吾寺平家の為に滅されしを、頼朝是を悲みて、寺敵重衡卿を渡さる、のみならず、供養の期に至るまで、随分の志を当寺にいたされき。私のことに於ては評義に及ばず。関東を見つぐべき事なれ共、是は勅定忝事なれば、それまではなし。関東を打ん事、定而仏意にも背べし。只何方へも参らざらんにかじ」とて、勢多へも向はざりけり。

傍線を付したように、移植後の記事における南都勢は、朝廷方に味方することを拒んでいる。これは明らかに、Aの「王土ニスミナガラ、イカデカ随奉ラテモ可有ナレバ、少々進ラセヨ」とは逆の主張である。本文改訂の結果、《受諾》から《拒絶》へという転換が図られたことが読み取れよう。じつは引用文Bの後には、僉儀の評決を無視して戦場に駆けつける「悪僧」の血気が描かれているのだが、しかしそれは忠心によるものではなく、山門勢から卑怯と責め立てられるのを嫌っての行動として描き出されている。王土王民の思想は顧みられなくなっていると言つてよい。この転換を考えるにあたっては、移植位置周辺の記事を視野に入れる必要があるだろう。ここではBの直前に注目したい。幕府軍が畿内に迫っているとの報告を受けた後鳥羽院が、非常時に備えて山門に入ろうとする場面である。流布本に登場する天台座主は、「君ヲ守護シ奉候ハンズル大衆ハ、皆、水尾崎・勢多ヘトテ馳向候ヌ」と理由づけて還御を勧めているにすぎないが、前田家本においては、そうした山門側の状況説明よりも先に、まず後鳥羽院を非難する言葉を投げかけている。

C―一院、梶井宮にいらせ給ふ。座主大僧正乗円参せ給ひ、「内々御気色もなく御幸之条、末代御誹をもうけさせ給ぬと覚え

候。口おしくも候物哉。用にも立候べき悪僧共は、水尾が崎、勢多へ向候。急ぎ還御成て、宇治勢多をさ、へて御覽候へ。さ  
り共神明も御助候はんずらん」と、泣々申されければ、九日に四辻殿へ還御なる。

傍線部があるために、座主が御幸の受け入れを拒否したのは、単に警護要員不足というだけでなく、突然の御幸そのものに不満を感じていたためだと理解されよう。流布本にあった「終夜御物語申サセ給ヒ」という表現が削られている事実も、そのことを示唆している。要するに、前田家本では《拒絶》のニュアンスが強まっているのである。一見すると、Cの最後にある「泣々申されければ」は院個人への同情の涙のようにも読めるが、今まさに軽率な行動で王威を損なってしまった不徳の君に対し、神明の加護に期待せよというのは、はたしてどの程度真剣味を帯びた慰めなのだろうか。そもそも加護があるというのなら、尾張川の防衛線が突破されることはなかったはずである。座主の言葉は虚しく響くばかりで、けっして先行きを明るく照らすことはない。彼は気休めの他力本願を口にして自覚しており、それゆえにこそ悲観の涙を禁じえなかった、という解釈も十分に成り立つように思われる。

さて、この記事Cの直後に前掲Bが移植されてきた理由は、もはや明らかだろう。寺社勢力が朝廷からの協力要請を拒んだというエピソードをことさら二つ並べることよって、前田家本は《拒絶》される後鳥羽院像》を強く印象づけることに成功している。類似記事を複数取り集めて相乗効果を作り出す手法は、上巻の伊賀光季自害記事の直後にも用いられている（城四郎兵衛による参戦拒否と、徳大寺公継による諫言を、記事順序の入れ替えによって連続させている）のだが、そちらは《敵対者を評価する帝王Ⅱ自らを相対化してしまう帝王》という文脈の確立に寄与するものであった<sup>(7)</sup>。すなわち、王威の絶対性を解体する者たちの姿が、上巻でも下巻でも意図的にまとめて語られていることとである。こうした大がかりな記事移植は他に見られない。前田家本にとっての王法相対化とは、多少強引な操作を施してでも推し進めるべき特別な課題であったと考えられる。

### 三 守護されない帝王

先に、記事Cの「さり共神明も御助候はんずらん」を気休めの他力本願として読み解いたが、「御助」に期待できないというのは、前田家本の基調に照らしても首肯されることである。後鳥羽院は神明に守護されるどころか、むしろ敗北させられたというのが、該本固有の主張であった。下巻の大尾部分にはこう記されている。

抑承久いかなる年号ぞや。玉体ことく西北の風に没し、卿相みな東夷の鋒にあたる。天照太神、正八幡の御はからひなり。王法此時かたぶき、東国天下を行べき由緒にてや有つらん。

上巻に遡ってみるに、義時追討を決意する際の後鳥羽院は、「天照太神・正八幡もいかでか御力を合せ給はざるべき」と考えていたという。とすれば、院が最も頼りにしていた皇祖神が、逆に彼を敗北へと突き落としたことになる。これはじつに皮肉な結末である。同様に現実とのギャップを生み出す要素としては、「承久」という年号に呪的な力が期待されていたとする独自記事もある。大津雄一氏はこれらを「意図的な操作」による「伏線」と捉え、「前田家本には、後鳥羽院に対するシニカルな見方がある」と論じている<sup>(8)</sup>。

院が神明に見放されていたことが明記されるのは、右の通り、下巻の大尾に至ってからであるが、しかしそれ以前の記事においても、単に虚しき期待が意味ありげに提示されているばかりではない。三種の神器（剣璽および内侍所）をめぐる次の独自記述は、暗示めいたものとして注目に値するだろう。源実朝横死後、承久合戦勃発前の場面である。

D―都には源三位入道の孫右馬の権の頭頼茂とて、大内守護にて有けるを、是も源氏なるうへ頼光が末葉なれと思召て、西面の者共に仰て、させる答なきをうたせられけるこそ哀なれ。陣頭に火をかけて自害しけり。温明殿に付てげり。内侍所いかが成

給ひけん。

承久元年（一一二九）七月十三日の放火事件については諸書に記録が見えるが、管見の限り、内侍所すなわち神鏡の罹災を特記するものは見出せない。例えば、『六代勝事記』は「希代の宝物ことごとく灰燼となりぬ」とし、『保暦間記』も「代代仙洞ノ重宝失ニケリ」とする。やや詳しい情報を載せる『吾妻鏡』であつても、「仁寿殿観音像、応神天皇御輿、及大嘗会御即位藏人方往代御装束靈物等、悉以為灰燼」と記すにとどまる。もし仮に神器に何か問題が起きていたなら、たとえわずかな疵であつても、これらの文献が書き漏らすことはなかつただろう。実際のところ、内侍所が鎌倉時代を徹して宮中に存在し続けたことは、『中務内侍日記』や『増鏡』によつて確かめられる。前田家本作者も当然そのことを知っていたはずである。答えの出ている「内侍所いかが成給ひけん」は、そもそも無用の問いかげだった。にもかかわらず、あえてそれを掲げているのは、内侍所にまで害が及んだのではないかと匂わせることにより、不穏な空気を漂わせるためだったと推定される。村上天皇の時代、天徳年間には自ら火災の難を逃れたとも伝えられる内侍所であるが<sup>9)</sup>、はたしてこの時は無事でいられたかどうか、安否を気遣わずにはいられなかったというわけである。末世の不安感が巧みに演出されていると言えよう。

ここで注意されるのは、もう一つの独自異文、波線部「させる答なきをうたせられける」が組み込まれている点である。源頼茂の討伐に關して、『愚管抄』は「謀反ノ心ヲコシテ我將軍ニナラント思タリト云コトアラハレテ」と説き、『保暦間記』も「將軍ノ望アルニ依テ謀叛ヲ起ス」と述べている。頼茂の無実を主張するのは一般的ではなかったようだ。おそらくDの波線部は、流布本系本文を改訂する際に生じたものである。もとになつたと思われるのは、頼茂討伐の直前に語られている、北条義時が源時元（阿野全成の子）を攻め殺したという記事である。流布本の当該部分には、「身ニ余事ナケレ共、陳ズルニ及バナバ、散々ニ戦ヒテ自害シテ失ヌ」とあるのだが、前田家本はこ

れを「しばらく防ぎた、かひけれども、無勢なればうたれぬ」と記すにすぎない。取り除かれた「身二余事ナケレ共」は、「させる咎なきを」に形を変え、頼茂の方に付加されたのだろう。かくして、義時が無実の時元を討ったという意味合いは消え去り、代わりに現れてきたのが、後鳥羽院が無実の頼茂を討ったという新たな筋書きであった。それを承けて、「内侍所いかが成給ひけん」と続くのであるから、院の横暴がきっかけとなって内裏が炎に包まれ、内侍所にまで何らかの害が及んだというへ読みが、必然的に成り立つわけである。

では、この異変は何を意味するのだろうか。想起されるのは、中世の歴史叙述において、三種の神器が皇祖神の意思の表れとして認識されていたことである。『神皇正統記』の天孫降臨の段にはこう記されている。

此三種ニツキタル神勅ハ正ク国ヲタモチマスベキ道ナルベシ。(中略) 中ニモ鏡(ヲ)本トシ、宗廟ノ正体トアフガレ給。鏡ハ明ヲカタチトセリ。心性アキラカナレバ、慈悲決断ハ其中ニアリ。又正ク御影ヲウツシ給シカバ、フカキ御心ヲトメ給ケンカシ。

三種の中でも神鏡が最重要視されていたことが窺えよう。じつは同書の安德紀には、「正体ハ皇太神宮ニイハヒ奉ル。内侍所ニマシマスハ崇神天皇ノ御代ニ鑄カヘラレタリシ御鏡ナリ」と説かれているのだが<sup>(9)</sup>、しかし、たとえ「正体」でなかったにせよ、内裏の鏡にも確かに神意は宿っていると見なされていたようだ<sup>(10)</sup>。同じ御宇に「ツクリカヘラレシ劍」が壇ノ浦合戦で失われたことについて、「末世ノシルシニヤ」と評されているところが目をひく。作者北畠親房は熱田神宮に「正体」の宝剣があると主張して、結局この事件を不問に付してしまうのだが、ともあれ、いったんは不安がよぎったことを率直に語っているのである。まして、宝剣喪失当時生きていた慈円の危機感は、どれほど大きかったことか。その克服のために、彼が『愚管抄』の中で導き出したのは、台頭してきた武士が宝剣に代わって天子を守るようになったとする解釈であった。宝剣が武力を象徴するものであるからこそ、かかる論理が成り



立つたわけである。だが、皇祖神の「フカキ御心ヲトメ」ている内侍所に異変が生じた場合は、そもいまい。靈威が信じられていた時代には、最重要の神器にもし万一のことがあれば、人々は加護が失われるのではないかと怯えるしかなかっただろう。天徳年間の内裏火災で内侍所焼失を危惧したときの、小野宮実頼の慨嘆「世はいまはかうござんなれ」（『平家物語』巻十一「鏡」）が思い出される。長久年間の内侍所罹災に関する『古今著聞集』編者の所感、「今行末いかならん。かなしむべきことなり」（第一「神祇」）も同様である。

以上述べてきたことを再度確認しておく。記事Dに見える「させる咎なきをうたせられける」と「内侍所いかが成給ひけん」とは、横暴に振舞う後鳥羽院を皇祖神が見放したことを暗示していると考えられる。よって、Dの直後に「凡院（およ）いかにもして関東を亡ぼさんと思召けることあらば也」と記されていることは大きな意味を持つ。倒幕計画に早くも暗雲が立ちこめているという文脈が作り出されるからである。前田家本の下巻末で明かされる「天照太神、正八幡の御はからひなり」は、上巻の段階から周到に予告されていた物語の論理だったと言えよう。

#### 四 周辺作品にみる怪異と靈験

帝王敗北の背後に超常的な力が作用していたことを伝える記事は、作中にもう一つ存在する。先に引用した「天照太神、正八幡の御はからひなり」云々に続く、「御謀反の企のはじめ、御夢に黒き犬、御身を飛越ると御覧じけるとぞ承る」がそれである。おそらくは源実朝が暗殺される直前の出来事、「黒き犬の御前を過る事ありけり」を凶夢として転用したものだろう<sup>(2)</sup>。これもまた、前田家本にしか見られない。慈光寺本や流布本は、予兆や吉事凶事によって歴史叙述を彩ることに消極的である。乱の展開を現実主義的に追いかけていくのが、本来の『承久記』のあり方だった。

では、他の文献の場合はどうだろうか。『承久記』以外にも視野を広げてみよう。すると、この乱をめぐるのは、何らかの子兆や超常現象と絡めて理解するケースの方が、むしろ一般的だったことが知られる。例えば、『平家物語』卷十二「六代被斬」には、隠岐に配流された文覚が怨霊となつて、後鳥羽院を呼び寄せたとする説が見える。また『太平記』卷十二「文観僧正事付解脱上人事」によれば、第六天魔王の画策があつたという。一方、『増鏡』第二「新島守」では、日吉神社御幸の折、山王が助力を拒否する旨の託宣を下したと語られている。神明に背かれる話は、このほか、『八幡愚童訓』甲本にもある。住吉神に祈請しようと訪れた後鳥羽院に対し、次から次へと凶兆が襲い掛かるのである。

承久ノ兵乱為御祈請御幸アリテ、憑思食ス御祈師檢校法印ヲ被レ召、既死去シタル由ヲ申ケルコソ不思議ナレ。又若宮ノ御前ニ向敵方ニ被レ立御劍、院ノ御方ヘ倒タリ。神慮ニ不レ叶御祈請ナレバ、不吉ノ瑞共怖敷ク覺ル。上皇ノ御気色モ替リ、供奉ノ卿相モ心ヲ騒シケリ。(中略)合戦ノ夜、住吉大明神ノ社頭ニ、京ヨリ逃籠ル上下男女多カリシニ、「今度ノ戦ハ京方ノ可レ勝ニテ有ツルヲ、八幡ノ余ニ仰在ル程ニ、関東ノ勝ツル事ヨ」ト声アリテ、馬ノ轡ノ音高ク鳴テ、御宝殿ノ内ニ入給フ。聞人身毛弥堅ケリ。

檢校法印の頓死、院のいる方向に倒れる御劍、明神のお告げの声、宝殿に入っていく轡の音。すべてが相俟つて、帝王の敗北を運命づけていく。超常現象が多く取り上げられているのは、八幡神の靈驗記という作品の性格によるものだろう。こうした歴史叙述が流通していくにつれて、鎌倉後期以降の人々のあいだには、承久の乱が神明の意思に左右されていたという理解が浸透していったに相違ない。

南北朝時代に成立した『諏訪大明神画詞』にも、承久の乱に関する逸話が収められている。ただしそこには、これまで見てきたのとは異なるタイプの超常記事が存在する。

承久式年冬、湖水ノ御渡違例セリ。見冬。祭礼。諸人恠ト思処ニ、同三年五月、天下ノ大乱起リテ、都鄙軍旅ヲ馳セト、ノフ。(中略)美濃国大井戸ト云フ所ニ着キヌ。又此間日ヲフル。五月雨猶晴間ナクシテ、此境ノ大河漲出ニケリ。波瀾兩岸ニ溢テ、浅深スベテ弁ヘガタシ。向ノ岸ニハ西軍数千陣ヲ張り、鎌ヲ調テ待カケタリ。軍士暫ク佇立スル処ニ、例ノ瑞鳥千万翼、兵馬ノ前ヲ數遍飛マワリテ、敵陣ノ背後ヲ囲マントスル勢ヲナシテ、クダリ瀨ニ飛渡リケレバ、大勢ノ鳥ノ飛ニ随ヒテ、同時ニ河エ打入タリ。古老ノ村民ダニ未ダ知ザル浅瀨ナリ。

諏訪湖の水に異変が生じたというのは、内乱勃発の予兆なのだろう。そして、いざ合戦が始まるや、何千万羽の「瑞鳥」が出現して、幕府軍に味方するかのごとく、浅瀨のありかを示したという。先に挙げた『平家物語』『太平記』『増鏡』『八幡愚童訓』が、いずれも敗者側に働きかけて敗北に至らしめる怨霊や神を取り上げていたのに対し、『諏訪大明神画詞』は勝者を勝利に導く靈験を描いている。両者は断絶しているわけではなく、あくまでも背中合わせの関係にあるが、どちらが歴史叙述を支えているかによって、作品の印象は違ってくるように思われる。

はたして代表的な軍記物語作品は、勝敗の行方と超常現象との関わりをどのように提示しているだろうか。まずは『平家物語』から確認しよう。巻六「嗔声」には、平家方の城助長が「天の告」通りに命を落とす話が見えており、巻十一「遠矢」には、源義経が白旗の翩翻をさして「八幡大菩薩の現じ給へるにこそ」と喜ぶ記事が存在する。両陣営それぞれを不思議な出来事が見舞っているわけである。『太平記』の場合も同様であって、巻五に登場する田楽一座の歌「天王寺之妖霊星ヲ看バヤ」や、巻十二で隠岐次郎左衛門広有に退治される怪鳥が、敗者側（鎌倉幕府北条氏、あるいは後醍醐天皇の建武政權）に付きまとう怪異であるとすれば、巻十の名場面、新田義貞の進軍する稲村崎が干上がる話や、巻十六において足利尊氏が見た観音菩薩出現の夢は、勝者を後押しする奇瑞に他ならない。背中合わせの超常現象は、このように同時並行している。これらよりはるかに分量の少ない作品であっても、事情はさほど変わら

ない。ある時は不思議な出来事を語り、またある時は世人の言を借りるなどして、勝敗に神明の意思が関わっていたことを伝えようとしている。例えば『保元物語』は、源為義が見たという「鎧共、風にふかれて四方へちる」夢の話載せる一方、「山王七社、官軍に入かはらせ給けるにや、いく程なく（院方を）責落さる。目出かりし神威也」や、「春日大明神、（左大臣頼長を）すてはてさせ給ひけりと、万人唇をかへしけり」といった記述を有する。室町軍記の嚆矢『明徳記』は、勝者となる將軍の旗の上を飛び回った靈鳥の記事を二箇所配置しており、敗者山名氏清の討死については、「天是をゆるさざるに依て、冥慮の神剣身を責て」と評している。作品ごとに程度の差はあるものの、勝利も敗北も神秘的な力に左右されていたとするのが、軍記物語一般の傾向であった。

その意味で、慈光寺本『承久記』はきわめて特異な物語である。慈光寺本の描く世界の中では、神明は歴史展開に積極的に関わることなく、まるで手を拱いているかのようなのである。のちの後嵯峨皇統の祖である土御門院が土佐に配流される場面に、「此君ノ御末ノ様見奉ルニ、天照大神・正八幡モ、イカニイタハシク見奉給ケン」とあるのは象徴的だろう。なぜ夢告や靈験を語らない叙述方法が採用されたかについては、いま十分に答える用意がないのだが<sup>(3)</sup>、いずれにせよ、こうした古態本の性格は改作後の流布本段階においても依然引き継がれていた。先行本文の呪縛の強さが偲ばれるところである。それが前田家本に至って、承久合戦関連の諸文献や、他の軍記物語に触発されたのか、漸くにして神明の関与を確かな言葉で語るようになったと考えられる。

帝王が皇祖神に見限られるというプロットを組み込んで、『承久記』は再生を遂げた。第二節で論じた《寺社勢力に拒絶される後鳥羽院像》は、その雛形に他ならない。王法を相対化する姿勢は慈光寺本以来のものであったが、前田家本は王威減退を自明の前提とあっさり片付けてしまうのではなく、なぜそうなったのか、実際どのような状態になっているのかを、ことさらに印象づけようとしているわけである。ただし、本稿冒頭でも述べた通り、王威を畏れる鎌

倉武士の姿をも同時に描き出しているため、王法はけっして完全停止に陥ってはいない。作品全体を通じて明らかに弱体化しているものの、時には力を發揮することもあつたとされる。かくして作中における後鳥羽院像は、中世以降の天皇の存在形態そのままに、権威の揺らぎを体現するものとして立ち現れることとなる。

## 五 おわりに

前田家本が神明の関与を説くようになったといつても、それは敗者側の状況を語る場合についてのみ指摘できる傾向であつて、勝者となつた鎌倉武士の側に寄り添う靈験記事は見られない。このことは注意されてよいだろう。じつは該本の成立圏は、南北朝時代の足利政権周辺に求められており<sup>44</sup>、もしそれが正しいとするならば、本文改訂作業の場には当然、『諏訪大明神画詞』（足利尊氏の外題奥書あり）の「瑞鳥」の話などが届いていたはずである。にもかかわらず、そうした逸話が採られなかつたのは、はたして偶然だろうか。あるいは意識的に回避されていたのではなかつたか。当時の歴史叙述作品の動向に照らせば、ますますその可能性を否定できないように思えてくる。

南北朝時代に足利政権周辺で生み出された軍記といえは、『太平記』と『梅松論』が挙げられる。とくに後者は前田家本『承久記』との影響関係が取り沙汰されてきた<sup>45</sup>。だが、ともに公武合戦を題材にしているといつても、こと靈験記事に関しては、両作品間に大きな隔たりがあることを認めなければなるまい。『梅松論』は足利一門の勝利を神明の加護によるものとして、盛んに奇瑞を語っているからである。例えば、建武三年（二三三六）三月の多々良浜合戦に際しては、香椎宮で「化人」とおぼしき老翁が尊氏の鎧の袖に杉の枝を差したと記す。また、京都侵攻途上の五月十五日の夜に、足利の家紋を連想させる「満月ニ黒雲ニ筋」が見えたことについては、「大ナル奇瑞」と評している。他にも、「昨日合戦無為更ニ非人力者歟、誠ニ以神ノ加護也」、「敵ハ皆落行ヨシ申上タリ。時分カラ誠ニ仏神

ノ加護ト憑敷ゾ覺シ」、「今日<sup>六月</sup>日数ヶ所ノ合戦悉未尅以前打勝タリシゾ、仏神ノ加護カト目出カリシ」といった文言を随所にちりばめている。足利一門の正当性を神仏の力によって保証することが、『梅松論』にとつての重要課題であつたようだ。帝王後醍醐と戦う武士を描く手法として、ごく自然に発想されたものだろう。

他方、前田家本『承久記』は、増水した宇治川を北条泰時らが命懸けで渡る場面においてすら、神仏の加護を話題にしていない。戦場を駆けめぐる武士たちの姿を活写し、彼らの行動力そのものが難局を切り開いていったというニユアンスで、合戦の一部始終を語っている。おそらく真に目指していたのは、朝敵であることの葛藤を乗り越えて勝利をもぎ取る武士たちの、生々しい姿を描くことだったのでないだろうか<sup>66</sup>。めでたき靈験奇瑞を取り上げない方が、彼らの葛藤を深刻なものにできることは言うまでもあるまい。前田家本は古態本以来のあり方からの脱皮を試みながらも、そこに一定の制限を設けたことにより、鎌倉武士の畏怖と奮起のドラマを作中に確立するに至つた。制限枠内で取り入れられた神明の関与というシナリオと、つぶさに描かれた武士の実力とが、相互補完的に未曾有の下克上を解き明かす、それこそが新たに模索された方法だったのである。

## 〔使用本文〕

引用にあたっては、ルビ等を省略するなど、表記を改めたところがある。

前田家本承久記：『前田家本承久記』（汲古書院、流布本および慈光寺本承久記：新日本古典文学大系、六代勝事記：『六代勝事記・五代帝王物語』（三弥井書店、保暦間記：『校本保暦間記』（和泉書院、吾妻鏡：国史大系、愚管抄：日本古典文学大系、神皇正統記：日本古典文学大系、平家物語：日本古典文学大系、古今著聞集：新潮日本古典集成、八幡愚童訓：日本思想大系、諏訪大明神画詞：神道大系、太平記：『軍記物語研究叢書 未刊軍記物語資料集 西源院本太平記』（クレス出版）、保元物語：日本古典文学大系、明德記：岩波文庫、梅松論：『翻刻・京大本梅松論』（国語国文）三三一八、三三一九）

注

- (1) 弓削繁氏『六代勝事記・五代帝王物語』(三弥井書店、中世の文学、二〇〇〇年)解説、および玉懸博之氏『日本中世思想史研究』I「日蓮の歴史観——その承久の乱に対する論評をめぐって——」(ベリかん社、初出は一九七一年)参照。
- (2) 注(1)玉懸氏著書、I「神皇正統記」の歴史観(初出は一九六七年)は、これを「宿世史観」と呼び、「増鏡」の世界観であると説いている。
- (3) 大津雄一氏「前田家本『承久記』の後鳥羽院と義時——その文学性の評価のために——」(『国文学研究』七五、一九八一年)、および佐藤泉氏「承久記」考察(『国文鶴見』二〇、一九八五年)参照。
- (4) 拙稿「朝敵形象の軌跡——『承久記』の本文改訂が意味するもの——」(『国語と国文学』八五—一一、二〇〇八年)。
- (5) 日下力氏「前田家本『承久記』本文の位相」(汲古書院『前田家本承久記』所収、二〇〇四年)参照。
- (6) 注(5)参照。
- (7) 注(4)参照。
- (8) 注(3)大津氏論文参照。
- (9) 神鏡が自ら飛んだ話は、『愚管抄』第二、「古今著聞集」第一、「平家物語」卷十一、「撰集抄」卷九などに見える。ただし、『愚管抄』はあくまでも「或・トモ云メリ」と紹介するにとどまり、『古今著聞集』は「されど此事おぼつかなし」と評している。また、『神皇正統記』は「ヒガ事ヲナン云伝侍也」と断じている。
- (10) 崇神天皇の時代に鏡と剣が新たに造られたとする説は『古語拾遺』にも見える。
- (11) 『太平記』卷三十「三種神器被閣事付主上々皇吉野遷幸事」に、「ゲニモ誠ノ三種神器ニテハ無レ共、已ニ三度大嘗会ニアフテ毎日之御神拜、清暑堂之御神樂廿余年ニ成ヌレバ、神靈モ何カ無ルベキ」とあるのが参考になるだろう。
- (12) 松林靖明氏「前田家本『承久記』の一側面(下)」(『青須我波良』一七、一九七八年)の後注参照。
- (13) 須藤敬氏「慈光寺本『承久記』——一つの歴史叙述の試み——」(『日本文学』四六—七、一九九七年)や、佐倉由泰氏「慈光寺本『承久記』の表現世界」(『軍記と語り物』三七、二〇〇一年)は、この問題について言及している。
- (14) 原井暉氏「前田家本承久記の作者の立場と成立年代」(『歴史教育』一五—二二、一九六七年)参照。また、大津雄一氏「前田家本『承久記』の「源氏志向」とその意味」(『古典遺産』三一、一九八〇年)はこの原井説を補強している。

前田家本『承久記』にみる王威と神意

- (15) 五十嵐梅三郎氏「梅松論の基礎的研究(二)」(『立正史学』一二、一九四〇年)、および拙稿「承久の乱と『梅松論』」(『国語と国文学』八二―一、二〇〇五年)参照。
- (16) 注(4)参照。

(きたむら まさゆき・関西学院大学文学部准教授)